



真田父子の息づかいを感じる
大坂夏の陣から100年以上経て、真田父子が
塾居していた屋敷跡に建てられた善名称院、通
称真田庵。境内には昌幸の墓碑や昌幸を祀る
真田地主大権現、雷封じの井などがある。
住所／伊都郡九度山町九度山1413
電話／0736-54-2019(九度山町役場)

大安上人が昌幸の庵跡に堂を創建したのが
1741年。その後昌幸の霊を鎮めるように建立
された真田地主大権現。



幸村が長男大助(幸昌)たちと水練を重ねたといわれている紀ノ川の真田淵と九度山の町。400年を経ても、山々や川の流は何一つ変わっていない。



幸村を偲び開催される真田まつり
「真田まつり」は戦前より、幸村の命日である5月7日に開
催されてきた。戦争で一度は途絶えたものの、現在は5月
5日に真田昌幸や幸村、大助をはじめ、真田十勇士など
の甲冑をまとった武将たちが街中を練り歩く。今も真田家
が九度山で愛されていることを物語るイベントである。

九度山町役場
住所／伊都郡九度山町九度山1190
電話／0736-54-2019



大河ドラマ「真田丸」
くどやま推進事業公式キャラクター
ゆきむらさま



もうひとつの故郷、 九度山で生きている

幸村父子は、九度山での生活を誰かの援助に頼るほか手段はなかった。知己であった紀州藩主浅野幸長から年50石の合力米や、周囲の裕福な商家などから融通してもらったが、それだけでは家来たちの生活もままならない。そこで国元で10万石近い大名となった長男信之に援助を頼み、なんとか生活を維持していた。

しかし屋敷の出入りに不自由はなく、和歌山城下にも度々出かけていたという。九度山で生まれた5人の子たちに囲まれ、妻と共に幸せに暮らす幸村。人々とも心通わせながら10年が経過したある日、父昌幸が救済の願いも叶わず65歳でこの世を去る。

幸村は焦燥感に襲われるが、時代は大坂冬の陣の直前。悪化する豊臣家と徳川家の関係。幸村は逸る気持ちを抑え、復活の機を待ち続ける。そこへ豊臣秀頼の使者が訪れ、大勢の浪人たちを束ねる大将として入城を請われる。幸村はこれを承諾し、長年暮らしたもうひとつの故郷・九度山を脱出、後世まで語り継がれる武勇を大坂の陣で披露することとなる。

この時、幸村と共に数百人といわれる九度山の若者が立ち上がったという。14年という長い暮らしの中で、幸村と九度山の人々の心は、互いの命を預け合う程、深い絆で結ばれていたのだ。



ボランティアスタッフは幸村公のファンクラブ?
無料で寛げる九度山まちなか休憩所と部屋
続きの「真田いこい茶屋」には、幸村ファンの
ボランティアスタッフが常駐し、軽食をとる事
もできる。おにぎりを六文銭に見立てた「六
文銭弁当」は、九度山で採れた山菜や野菜
をふんだんに用いたスタッフの手作り(要予
約)。幸村を身近に感じられる素朴な味。
真田いこい茶屋
住所／伊都郡九度山町九度山1722-1
電話／0736-54-9058

今も息づく
幸村への思い



手作り甲冑 九度山真田隊
町おこしとして始まった九度山町住民クラブ。その中で「幸村さん
かない」と赤備えの甲冑を紙で作る、真田まつりなどに参加してき
たのが梅下修平隊長率いる「手作り甲冑 九度山真田隊」だ。紙
では歩いても甲冑らしい音がしない工夫を重ね、アルミ板を使う
など、より本物らしさを追求。梅下隊長は、「子どもの頃から身近な存
在だった幸村公。この甲冑を着ると声まで変わってくるんですよ」と
幸村愛を隠さない。